

京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修の実施報告

- 2006 年度韓国国内研修の実施について -

許 明子

要 旨

筑波大学留学生センターは昨年度に引き続き、2006 年度も韓国京畿道外国語教育研修院にて、京畿道現職日本語教師の 2 回目の日本語研修を行った。本稿では、2006 年 9 月に現地で行った研修について報告を行う。

本年度は、合宿研修実施前に 3 日間自宅にてオンライン研修を行った点、会話授業を中級と上級の 2 つのレベルに分けて教材作成及び授業を実施した点、2007 年 1 月に本センターで行う日本国内研修に派遣を希望する研修生のみを対象に口頭試問を行った点が昨年度の研修と異なる。さらに、今年度の研修は昨年度の反省点を改善しつつ、いくつかの点で新たな試みがあった。

【キーワード】レベル別クラス編成 オンライン研修 評価

Report about the In-service Program for Korean Teachers of Japanese Training Program of the Gyeonggi-do Institute for Foreign Language Education: training in Korea, 2006

HEO Myeongja

【Abstract】 Following last year, in 2006 the International Student Center of the University of Tsukuba held for the second time the Gyeonggi-do Japanese language teacher training program in Korea.

This year's training program was different in several aspects from last year's. First of all, three days prior to the official start of the program online training was given to the participants. Secondly, teaching materials were prepared on the basis of dividing conversation into intermediate and advanced levels. Thirdly, an oral examination was conducted only for those participants wishing to join the training program which is to be held at the International Student Center of University of Tsukuba in January 2006. In addition, notwithstanding the inclusion of a range of improvements compared to the last year's program there were still several points left to be re-evaluated for next year's training program.

【Keywords】 class formation according to level, the online training, evaluation

1. はじめに

本研修プログラムは2005年度に1回目の研修を行い、2006年度は2回目の研修を行う運びとなった。2006年度の韓国国内研修は2006年9月4日(月)から9月29日(金)までの4週間にわたって京畿道外国語教育研修院において実施された。本稿は、2006年度の韓国国内研修の実施にあたって2005年度の研修と異なる点を中心に報告を行う。研修の実施にいたった経緯や教材、授業内容に関しては、本センター論集第21号「特集：韓国京畿道外国語教育研修院における現職日本語教師研修プログラム」(2006:137~289)を参照されたい。

2. 概要

2.1 対象

本研修が始まる際に教育経歴が長い教師から先に研修を行うという基本方針があったため、2005年度は40代半ばから50代の研修生が中心になったが、今年度は昨年度に研修が受けられなかった50代の教師が研修に参加し、20代後半から50代半ばまでと研修生の年齢や教育経歴、日本語力にさらに大きな開きが生じた。今年度に研修を受けた教師は45名であるが、中には研修生の中には日本滞在歴が1年以上の教師や国際交流基金日本語国際センターの研修を受けた経験がある教師がいる反面、来日経験がない教師もいて、日本語力において昨年度よりさらに差が大きくなっていった。

研修生の性別、年齢、勤務先は以下の通りである。

性別 男性：18名、女性：27名

年齢 50代：5名、40代：31名、30代：7名、20代：2名

公立学校勤務：23名、私立学校勤務：22名

中学校勤務：5名、高等学校勤務：40名

また、日常生活において日本語を使用する環境がほとんどなく、日本語によるコミュニケーション能力の向上がもっとも大きな課題となった。

2.2 研修期間

2006年度の韓国国内研修では、今年度の新たな試みとして、京畿道外国語教育研修院にて4週間の合宿研修を行う直前に、8月30日から9月1日の3日間自宅にて各自が自習研修を行うというオンライン授業を行った。現職教師である研修生が研修を受けている間、各勤務校では臨時講師を雇用することになっているが、そのためには研修の全期間が30日以上でなければならない。しかし、今年度の研修期間が9月4日から9月29日までの26日間であったため、研修院での合宿研修が始まる前の3日間に自宅で研修を行うオンライン授業を実施し、研修期間を8月30日から9月29日までの31日間としたのである。

オンライン授業の課題は、本センターの研修担当者が研修に必要とされる項目について、1

日に1つの課題を提示し、京畿道外国語教育研修院のホームページより毎日1つずつ課題を掲載した。研修生はその日の課題をホームページを通して知り、添付の様式をダウンロードして、課題を行うことにした。課せられた課題には成果物の提出が義務付けられ、研修の最終評価に含まれることになった。

オンライン研修期間に与えられた課題は以下の通りである。

2006年8月30日：日本語による自己紹介文の作成（添付様式ワードを利用）を通じて、ワードの使い方、日本語入力システムを熟知させる。

2006年8月31日：各自の日本語の授業について内省し、日本語の教え方に関するアイデアシートを作成提出（添付様式を利用）、インターネットを利用した日本語の教授に必要な教具、素材の利用方法を周知させる。以下のサイトにログインし、会員登録及び使い方を学ぶ。

A. 「みんなの教材サイト」（韓国語版）国際交流基金日本語国際センター

<http://momiji.jpf.kyozai/korea/index.php>

B. 「であい」（韓国語版）国際文化フォーラム

http://www.tjf.or.jp/deai_korea/index.html

2006年9月1日：日本滞在経験についてまとめる（添付様式ワードを利用）、日本文化の中で興味のある分野について調べる。

2.3 会話能力によるクラス編成

今年度の研修の最も大きな特徴は、会話授業を研修生の会話能力により、2つのクラスに分け、レベルによって異なる授業を試みたことである。2005年度の研修を行う際も研修生の日本語力によるクラス編成を希望したが、教育経歴の長い研修生をレベルによってクラス分けし、研修を行うことに抵抗があり、実現できなかった。

会話授業を行う際に研修生一人一人の会話能力の差が大きい中で、「話す能力を伸ばす」「日本語で話す機会をたくさん作る」という授業目標を達成するのは非常に困難であり、昨年度からの懸案であった。今年度は昨年度の反省を踏まえ、会話授業のみにおいてレベル差によるクラス編成が実現したのである。研修生の会話能力をクラス編成のためにチェックする判定テストを実施することができなかったため、研修初日のオリエンテーションで中級会話授業と上級会話授業のカリキュラムや授業内容を説明し、研修生各自が自分の会話能力を判断し、クラスを選択するようにした。その結果、中級会話授業を選択した研修生が圧倒的に多く、最終的に人数の調節を行っても中級会話クラスを希望した研修生が27名、上級会話授業希望者が18名となった。研修生自身が日本語の発話、コミュニケーション能力に自信が持てず、自らが中級レベルであると判断した人が多かったということである。

研修生自身の判断により、会話クラスのレベル別編成を行った結果、研修生は自分の能力に見合った授業が受けられたこと、研修生同士の能力の差が昨年度よりは縮まったためワークシ

ヨップやグループ活動がスムーズに行えたことが成果としてあげられる。しかし、会話教材を作成する際には1クラス12名前後を想定していたため、グループワーク、ペアワーク、発表会などの授業活動を変更しながら授業を行うことになった。

2.4 統合シラバスによる授業運営

本研修で使用する教材は、作成するにあたって各科目が関連のあるテーマや内容を取り上げ、各技能で取り扱う素材も関連のあるものを選定し、統合シラバスによって授業が行えるよう構成されている(許2006:140~144)。統合シラバスによる授業運営の利点としては、文法と誤用分析で学んだ項目を聴解授業で関連のある素材を利用して聴解スキルが養成でき、さらに読解授業で関連のある読み物を扱うといったことである。したがって、この統合シラバスによる教材作成の利点を生かすためには、同じトピックを扱う技能別授業がつながっている必要がある。しかし、今年度は会話授業をレベル別クラス編成した上、他の科目より3コマ多い9コマの授業を行ったため、統合シラバスの利点を十分に生かすことができなかった。各科目の授業の流れは以下の通りである。

第1週目は、文法と誤用分析と教授法が4クラスを順番に授業を行い、2日にかけて1課を終わるペースで進めたのに対して、会話授業は中級・上級別に同時に授業を進め、毎日1課ずつ終わるペースで授業を進めた。会話は9コマの授業を行い、第2週目の半ばで授業を終了した。その後、聴解を2人の講師が前半(トピック1、2、3)と後半(トピック4、5、6)を担当し、同時に授業を進めた。さらに、第3週目の後半に文法と誤用分析、教授法の授業が終わった後、読解を2人の講師が前半と後半に分け、授業を行った。第4週目に聴解が終わった後は2人の講師が2クラスずつ特集を担当した。各週の授業科目は以下通りである。したがって、第1週目の文法と誤用分析の授業で学んだ内容と関連のなる内容を聴解で学び、さらには読解で読み解くという構成で、時間差をおいた技能別授業運営となった。

第1週目～第2週目：文法と誤用分析、教授法、会話(中)、会話(上)

第3週目：文法と誤用分析、教授法、聴解

第4週目：読解、聴解、特集

以上のように、今年度の研修が昨年度の研修と異なる授業運営をするようになったのは、会話授業が9コマになったこと、中級会話授業を2クラス、上級会話授業を2クラス開設したことによる。

3. 開講科目

3.1 必須科目

2005年度の韓国国内研修の実施のために、聴解、読解、文法と誤用分析、会話、作文、特集の教材開発を行ったが、2006年度は2005年度の教材の改訂を行い、会話、作文以外は同じ教

材を使用した。ただし、2006年度研修の新たな試みとして、会話の授業のみ研修生の会話能力によるレベルに合わせたクラス編成を行い、中級会話クラスと上級会話クラスを設けた。それにより、中級会話と上級会話に適切な教材が必要になり、新たに「会話(中)」「会話(上)」の2科目の教材開発を行った。これらの教材開発の経緯については本号論集高橋純子・小池康「京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修のための教材開発 中級会話教材製作」及び小野寺志津・杉浦千里「現職日本語教師研修のための新規上級会話教材開発と実践報告」を参照されたい。また、会話クラスは2005年度は4クラス全て同じ内容で6コマずつ授業を行ったが、2006年度は中級、上級レベルそれぞれ9コマの授業を行った。そのため、授業時間数が足りず、作文は開講しなかった。2006年度に開講した必須科目と授業時間数は以下の通りである。(1コマ90分授業)

聴解：4クラス×6コマ	読解：4クラス×6コマ
文法と誤用分析：4クラス×6コマ	教授法：4クラス×6コマ
会話(中級)：2クラス×9コマ	会話(上級)：2クラス×9コマ
特集：4クラス×3コマ	

3.2 選択科目

2006年度を選択科目(クラブ活動)としてテレビ番組制作、ラジオドラマ、演劇(2本)の3つの科目を開講した。選択科目は計8コマ(50分授業)であったが、科目内容説明、スケジュール、役割分担、準備、録画、練習、発表会のすべてをこの時間内に行った。必須科目の授業が中心になる中、短期間に選択科目の準備から発表まで行わなければならない研修生の負担はかなり大きかったようである。

選択科目の目的は、選択科目を準備する過程でネイティブ講師と日本語による意思疎通を行い、必須科目では学べなかった日本語による意思疎通を図ることであり、この目的は十分に達成できたように思う。ラジオドラマ班の練習過程では研修生がそれぞれ担当するせりふを練習し、録音、修正を繰り返していく段階で各自の日本語の発音をモニタリングし、矯正を行うことができた。テレビ番組制作班ではテレビ番組の編成、せりふの作成、録画、編集を行う過程で日本語による意思疎通を図り、さらには機器類を利用した編集作業も学校現場のクラブ活動を指導していく上でよい経験になったと思う。

また、演劇班は2チームともに韓国の物語を日本語で演じる題材を選択した。一つは韓国のテレビ番組を日本語で演じたもので、もう一つは韓国の昔話(フンプ伝)を現代版に訳しなおしたものを演じた。韓国語のせりふを日本語に訳す過程で日本語と韓国語の表現の違いや発音練習を行い、グループ別の共同作業を行うことにより、日本語による意思疎通を図った。

3.3 模擬授業

教授法で実際の学校現場を振り返り、問題点を把握し、改善するため内省及び教材作成などについて授業を行ったが、模擬授業は教授法とリンクさせた実践的な場であった。1クラスの中に3人～4人となるグループを作り、各グループで一つのテーマを選び、他の研修生を学生に見立てて模擬授業を実施した。

模擬授業は発表形式で授業が行われ、二クラスが合同で3コマずつ計6コマの授業を行った。研修生は実際の学校現場で日本語を教えるときに感じていた問題点について共有し、効果的な教え方について情報交換を行った。文字の導入や文型の教え方、歌を利用したテ形の導入など普段学校現場で感じていた問題点や授業の進め方について情報を共有する貴重な時間となった。この模擬授業を通して研修生同士が刺激を与え合い、活発な意見交換、授業改善に向けて積極的に取り組んだ。

3.4 ICT

韓国の中高等教育の日本語教育現場においてはインターネットを利用した日本語の授業を積極的に取り入れている。しかし、教育経歴の長い教師はコンピュータの利用方法やインターネットからの情報収集方法などに長けていない人もいる。そこで、パソコンを利用した授業のやり方を中心に講義を行った。

講義時間数は2クラス合同で3コマずつ(計6コマ)を行い、研修院の日本語派遣教師(姜星鎮氏)が授業を担当した。授業内容はパワーポイントの作り方、各教科書に付属しているCDの音声を教室で利用する方法、インターネットから画像や音声を取り出す方法などを中心に授業を行った。

3.5 ビデオ教材の視聴自習

ビデオ視聴自習授業は4本のビデオ教材を見ながら研修生が聴解の自習を行う授業である。ビデオ教材は2005年度同様、日本のテレビ番組を録画したものであるが、「プロジェクトX」2本(NHK)、「世界一受けたい授業」(TBS)、「学校へ行こう」(TBS)の計200分の内容である。ビデオ視聴自習授業の評価は、ビデオの内容から20問の聴解問題を作成し、聴解テストを行った。この聴解テストについては、次章の評価で詳しく述べる。

4. 評価

4.1 研修全体の評価

前章で述べたように、研修期間中は必須科目をはじめ、選択科目やその他の様々な科目を開講したが、全ての研修科目には評価が課せられており、評価の合計点は1000点である。ただ、評価の合計点は研修修了時に100点満点に換算され、日本研修派遣のための成績に反映され、

各勤務先にも報告される。

評価科目の配分点数の内訳は以下の通りである。

〈必須科目〉 640 点

文法と誤用分析：130 点	聴 解：130 点
読 解：130 点	教授法：130 点
会話（中・上）：70 点	特 集：50 点

〈選択科目〉 100 点（PASS：100 点、FAIL：64 点）

〈その他〉 260 点

模擬授業：40 点（PASS：40 点、FAIL：24 点）
ICT：30 点（PASS：30 点、FAIL：18 点）
ビデオ教材視聴自習：100 点（聴解テストによる）
オンライン課題物：30 点（PASS：30 点、FAIL：18 点、未提出：0 点）
出席率：50 点
研修協力貢献点：10 点（全体代表、クラス代表、選択科目代表に加算点）

研修の実施にあたって、講師陣、研修院のスタッフ、研修生がともに敏感になっていたのが評価の方法や項目を設定する部分であった。本研修の評価項目については、西村（2005：281～289）に詳しく記されているので、本報告書では省略する。西村では聴解評価項目を中心に報告されているので、本報告書では文法と誤用分析の評価項目を資料として添付する（〈資料 1〉）。

本年度の研修において新たに加えられたのがビデオ教材視聴の評価である。ビデオ教材視聴は計 6 コマを設け、研修生が各自のペースに合わせてビデオを視聴し、聴解の練習、語彙を調べようにした。自習の授業に対してどのような評価を行い、何を測定するかが大きな問題であった。そこで、ビデオ教材の内容や語彙の理解度を確認するために聴解テストを作成、リスニングテストを行った。聴解テストの出題はすべてビデオの内容を一部切り取って編集したものを使用した。テストの形式は四択式問題 20 問、質問、選択肢ともにテープから流れる内容を理解し、答えをマークシートに記入する方法で実施した。穴埋め形式を 7 問、聞いた内容と異なるもの、もしくは同じものを選択する問題を 13 問作成した。テストの結果、平均点 75 点、最高点 100 点、最低点 25 点で、研修生の聴解能力に大きな差があることがこのテストの結果からも分かる。

4.2 口頭試問

口頭試問とは、韓国国内研修を受けた研修生の中から 12 名の成績優秀者を選抜し、翌年 1 月に筑波大学本センターで行う日本研修に派遣する研修生を選抜するための口頭能力試験で

ある。昨年度は9月に研修院における韓国国内研修を行った中から成績優秀者12名が、翌年1月に本センターで研修を受けた。2005年度の日本研修として2006年1月に本センターで行われた研修については本論集の報告(許:「現職日本語教師を対象とした日本語研修プログラムの実践報告 2005年度筑波大学留学生センターにおける京畿道外国語教育研修院日本研修の実施について」)を参照されたい。

今年度は、本センターへの派遣を希望する研修生のみを対象に口頭試問を行い、その成績を反映させた点である。昨年度の研修では研修生全員が口頭試問を受け、その中から成績優秀者が選ばれたが、今年度は筑波大学への派遣を希望する研修生に限って口頭試問を行った。さらに、昨年度に韓国国内の研修を受けた研修生の中で今年度の筑波大学への派遣を希望する研修生は再度口頭試問を受け、もう一度挑戦できる機会が与えられた。

口頭試問は昨年度の研修生5名を含む27名を対象に、9月25日に面接を行った。口頭試問は以下の要領で実施した。

面接時間:10分程度、質問は3問

面接方法:面接者と被面接者の1対1会話形式、会話内容は録音を行う。

評価項目:正確さ、音声(イントネーション、発音、アクセント)、流暢さ、内容

評価方法:面接時に面接官が評価を行うが、面接終了後4人の面接官が再度評価を行う。

5. おわりに

本年度は2年目の研修であり、昨年度の問題点を反省し、改善しつつ研修を実施した。研修生の会話能力に合わせた会話クラスの編成、ビデオ教材のリスニングテストの実施、選択科目の自主的な活動、研修実施前のオンライン授業による予習が改善された点である。

しかしながら、短期間の研修に多くの内容を盛り込んだ授業で、各科目に課せられた課題も多く、研修生に負担を与えたことは昨年度と同様な問題として残っている。また、会話授業を9コマ行ったため、研修期間が足りず作文の授業を削らざるを得なかった。研修生からは作文能力を養いたいという希望が聞かれ、来年度の研修に向けて改善しなければならない問題の一つである。また、研修において最も重要な科目である必須科目の内容を研修生の能力に合わせて難易度が調整できる教材に改訂することも残された大きな課題といえよう。

参考文献

韓国教育部(1997)「外国語科教育課程あ()」『第7次教育課程教育部告示』

姜星鎮・許明子(2006)「韓国京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修のための研修実施報告 2005年度韓国国内研修の実施について」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第21号

木田真理(2004)「外国人日本語教師研修における文法授業のあり方 文法シラバス整備に向

けて」『日本語国際センター紀要』第14号：51-68

西村よしみ(2006)「現職日本語教師研修のための聴解授業の評価」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第21号：281-289

許明子(2006)「現職日本語教師再研修のための教材開発全般について」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第21号：137-146

許明子・和氣圭子(2006)「現職日本語教師研修のための文法と誤用分析教材開発」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第21号：191-200

横山紀子(2005)「第2言語教育における教師教育研究の概観」『国際交流基金日本語教育紀要』第1号：1-18

<http://momiji.jpf.go.jp/kyozai/korea/index.php>

http://www.tjf.or.jp/deai_korea/index.html

＜資料1＞文法と誤用分析評価項目

評価項目(2006)

項目：文法と誤用分析

評価者：許 明子

評価項目	点数	使用言語領域
言語的内容	36-50	各レッスンの文法内容の形態的特徴及び語用的特徴について明確に理解し、説明することができる。 韓国人日本語学習者の誤用の原因について明確に把握し、的確な解決策を見出すことができる。 各文法項目による的確な用例を3文以上作ることができる。 実際の授業で教えるための有効な教授法が提案できる。
	16-35	各レッスンの文法内容の形態的特徴及び語用的特徴について大理解し、大体説明することができる。 韓国人日本語学習者の誤用の原因についてその原因を推測することができる。 各文法項目による用例を1文～2文程度作ることができる。 実際の授業で教えるための教授法を考えることができる。

	0-15	各レッスンの文法内容の形態的特徴及び語用的特徴を説明することが難しい。 韓国人日本語学習者の誤用の傾向について原因を把握することが難しい。 各文法項目による用例を作ることができないか、あるいは適切な例文が作れない。 実際の授業で教えるための教授法を考えることが困難である。
	Total in this section : 50	
授業における参加度	36-50	各レッスンに与えられた予習を行い、授業の中で積極的に発言し、参加する。 グループワーク、ペアワークにおいて積極的に参加する。 韓国人日本語学習者の誤用を防ぐための教え方について積極的に議論に参加する。
	16-35	各レッスンに与えられた予習を時々行い、授業の中で時々発言し、参加する。 グループワーク、ペアワークにおいて発言を求められれば参加する。 韓国人日本語学習者の誤用の現状について時々報告、議論する。
	0-15	各レッスンに与えられた予習を行わず、授業の中でほとんど発言することがない。 グループワーク、ペアワークにおいて消極的である。 韓国人日本語学習者の誤用の傾向、現状について把握することが難しい。
	Total in this section : 50	
課題達成度	21-30	宿題、授業における課題を十分に行い、その成果について積極的に発表する。 学習した内容、教師の意図を十分に理解し、日本語現場における応用の方法について積極的に議論、発表する。 創造性、独創性、応用力に優れている。
	11-20	宿題や課題を時々行い、教師からの指示があれば授業の中で発表する。 学習した内容、教師の意図を説明すれば理解することができ、学習成果を日本語教育の現場に応用する方法をどうにか考える。 創造性、独創性、応用力が一応見られる。
	0-10	宿題や課題を行わず、授業の中で発表、議論することがほとんどない。 学習した内容、成果を日本語教育の現場に応用する方法を見出すことが難しい。 創造性、独創性に欠けている。
	Total in this section : 30	
Total of all sections : 130		